

【文芸時評】

しなやかな感性を

横尾 和博

一年過ぎるのが早い。歳のせいしか特にそう感じる。そこでまた今年も2009年の文芸回顧を試みることで、いまの文学状況の一端に触れてみたい。

09年の話題はなんとといっても村上春樹「1Q84」のBOOK1とBOOK2である。5月に発売以来、2冊ですでに200万部を突破している。こう人気が先行すると熱が冷めるまで読むのを控えておこう、と考えるのも当然で、潜在的な読者はまだ数十万人いるかと思う。しかし10年の夏にはBOOK3が刊行される予定であるし、10月のノーベル文学賞の最有力候補となろう。話題はもっと大きくなること間違いない。私もこの十月にはノーベル賞を受賞した際に緊急に出す新聞社の寄稿文を頼まれ執筆していたのだが、結局ボツ。東京FMの番組で夏に2回ほどしゃべり、その後ノーベル賞時期にあわせ4日間「読書の楽しみ方」にかこつけて村上春樹についておしゃべりをしただけだった。

「1Q84」は関連本が早くも四、五冊でたが、評論としてのを射ていたのは加藤典洋の『村上春樹「1Q84」をどう読むか』所収の評論くらいだ。もっとも村上春樹は「979年のデビュー以来一貫して「文壇」から無視されていた。心理学や社会学からのアプローチは盛んに行われていたのだが。前記加藤の批評の趣旨は「エンターテイメント性」とジャック・ラカンの言葉でいう「換喩」。「しけた男女の物語を持つ世界的な普遍性」についてである。加藤典洋は、吉本隆明以後、もっとも鋭敏な批評家であるが彼の村上春樹論もまた異彩を放っている。

さて09年の2つの芥川賞は冬の津村記久子「ポトスライムの舟」、夏の磯崎憲一郎「終の住み処」。津村は四年前の絲山秋子を彷彿させる。磯崎は前号でも触れたが保坂和志を文学上の師としている文学本格派である。現役商社マンであることからそちらにスポットがあたっているが、両芥川賞作家は本格的な文学志向派である。

三島賞の前田司郎「夏の水の半魚人」は、小学校5年生の男の子の視点から東京のまちと思春期に向けて旅立とうとする少年、少女たちを叙情的に描く作品。まだ31歳の若い書き手で、演劇の世界では既に名をあげている。

ところで最近の特徴は、文学志望の青年たちのなかから「現代文学」が生まれてくるのではなく音楽、演劇、映画など隣接した芸術分野からの参入者が多いことである。演劇では前述の前田司郎、ほかに本谷有希子は最近何回か芥川賞と三島賞の候補に上がっている。映画界では、夏の直木賞候補になった西川美和は映画監督、脚本家であり今夏公開された「ディア・ドクター」を撮った。その原作本も執筆しており「きのうの神様」が直木賞候補作となったのだ。

文学志向派と隣接分野からの参入派と活気があって大変よいことである。いまの文学事象をとらえるにあたって、文学の一本道の私たちも反省すべきところが大きいにあるのかもしれない。

その他09年の収穫は、宮本輝「骸骨ビルの庭」、辻原登「許される者」、佐藤友哉「デンデラ」、桐野夏生「IN」、古処誠二「線」などである。それぞれに触れると長くなるので割愛するが、同人雑誌に集う人たちも、現代の作家の作品から学ぶことがたくさんあるように思える。しなやかな感性を持ち、硬直化せずに現代の文学情況にコミットしてほしい。

さて同人雑誌作品について私見を述べる。今回は10月中旬までに編集部に寄せられた雑誌が対象となっている。

書く行為は孤独であり、同人誌の合評会に参加し励まされることはあっても、最終的に文字を虚空に刻み込むのはひとりの作業である。だが書かれた作品はどこかで誰かの目に触れている。同人以外にも、私のように送られてきた同人誌の作品には必ず目をとおしている者もいる。ひたすら読む行為も孤独のうちに行われる作業だが、書き手の皆さんはぜひ情熱を失わずに臨んでほしい。

「海峡派」一一六号の高崎綾子「水脈」は、一人暮らしの老女の話で、亡くなった夫が自宅に戻り、お気に入り椅子に腰掛け熱爛に河豚ちりで夕食を摂ろうとする情景が描かれ

る。一方家の裏山では、地下の水脈が変わったようで小さな崩れが起きていた。地下水脈と亡くなった夫が戻って来たことに関連はあるのか。文学の香気が漂う作品で秀逸。

「九州文學」7号は、小説作品が多く三二〇ページを超え重量感ある装いである。おもしろい作品が多いが、なかでも森田★史「畑の隣り」は畑の隣の洒落たアパートに住む若夫婦と娘が畑を一人で耕している老婆と親しくなる話。都市化と農業、それに関わる人間たちのテーマはすぐれて現代的である。また同号の木匠葉「カワユイ布教女」は、地方都市の団地で一人暮らしの高齢の男が、布教で訪ねてきた若い女性たちに惹かれ彼女たちが聖書の話をしにくるのを心待ちにしているストーリーが愉快。

「野火」26号は夏川龍一郎「小人閑居して」。定年を残して警察を退職した主人公。飲み仲間と毎日酒ばかり飲んでいゝのだが、ある日競馬の馬券が大当たりした。堅い職業の間が、定年を機に一気に鬱屈を発散させるようなアウトロ―に変身するその変わり身に文学の根をみた。

「群青」75号 近藤耿子「フォー・イン・ラブ」、70歳になった独身女性が法事のために大阪にでかける新幹線で60歳前後の一見平凡な男性をみかける。その男性とは偶然帰りの列車のなかで隣り合わせ、女性の恋が始まる。

「じゅん文學」60号 傳頻伽「ピグマリオンの妻」も恋愛譚。失恋して沖繩旅行にでかけた女性は男と知り合う。その後女性は結婚し、離婚する。再会したふたりはいっしょになるが一カ月後に男は事故死する。彼の日記を読む主人公は初めて沖繩に生きた彼の内面を知る。日記を紹介する部分が全体のバランスからみると多すぎるような気がするが、男の内面を描き出すとする姿勢には共感を覚える。同号猿渡由美子「線を打つ」は、60歳と52歳の子どものいない夫婦が、夫の仕事仲間の子どもを預かる。小学4年生のその男の子の母は男と逃げ、父は入院中という。しかし子どもは心を開くことがない。家族、孤独という現代社会を覆うテーマと子どもの下から見上げる視線に心を惹かれた。

「佐賀文学」26号もページ数が厚く小説も充実。なかでも坂本紀美子「信じる場所へ」、西村恵美子「伝説の時間」、松尾美咲「金星」、畑島剛「ひまわり荘」、木村豊「蚊帳の中」、吉山祐子「あしたの私」、佐藤浩二「月よ銀木犀を照らせ」が印象に残った。紙数の関係で2編を紹介したい。坂本紀美子の作品は語りの口調がおもしろく、語り手は19歳の「僕」。大学進学を前に母から1000万円の現金を積まれ、母はこれで大学の費用をまかない卒業後は自立せよといい、これから自分のために貯蓄するという。母は、一人で「僕」を育てた。軽快な文章のなかに家と親子、信仰などの問題を提起しよくまとめている。佐藤浩二の小説も夫と離婚した女性警官が一人娘を育てながら、仕事と家庭の両立のなかでいじめや非行、家庭内暴力などに心を痛めるという話。ストーリーも上手いし「銀木犀」の比喻も効果的。松尾の作品は子どもどものころに同級生の事故死の原因で心の傷を負った女性の話でラストの一行に凝縮された文学的な感の鋭さがみえて最後に期待したい。

同人雑誌のなかには「老いの孤独」を扱った作品が多い。「火」7号の庭冬明「静かな風景」は、妻と死別して以来脳梗塞を患う主人公が、ふたりのヘルパーに介助されながら車椅子生活を送る話。亡き妻を回顧する箇所、孤独な環境にあつて屹立した精神を持ち続ける姿勢に共感。

「視点」71号の筑紫亮「陽が傾いて」は、差別と被差別のテーマが重い。全般的にストーリーを明解にするとよいかもしれない。やや遠回りのような気がする。石川テイ子「健作じいちゃん」は関東大震災のころの話。茨城で煙草の木箱を作って専売局へ納めていた一家の歴史と戦争をとりあげた作品。懐かしい風景のなかに小説の種（シーズ）が見え隠れして感心した。

同様「たまゆら」75号の山本日生子「銀杏の木の下で」は、国民学校の生徒だった主人公の回顧譚。空襲で疎開した一家の話で、前述の石川作品同様に作品のなかに単なる「懐かしさ」だけに収斂しない「なにか」が存在している。

「小説藝術」50号ではあいかわらず竹森仁之介がライフワークの「移民もの」である短篇「月と星と」を書いて元氣。川島徹「赤い旗」は、主人公が居酒屋でみかけた男は、長い間陽のあたらないところで小説を書きながらガードマンの仕事をしている。その旗が主人公には光輝いているように見えたと、という話で感動的。

「秋田文学」18号では、渡辺麻実「沈丁花」。単なる恋愛譚なのだが可能性があるような気がした。可能性とはストーリーのことではなく、「沈丁花」に比喻される感性のことである。

「婦人文芸」87号の淘山竜子「思い出の人」はストーリーカーの恐怖小説でもしろいが、立ち上がりがもつとすつきり、テンポよく展開すれば満点。

「二十一世紀」12号相加八重「糸山村立芋の迫小学校で」は、地方の学校で地域に学校を開放するオープンスクールを実施しているところでの、小学生と高齢者の交歓の話。方言と土俗の凝縮場面が著者の持ち味で、今回も遺憾なく発揮されている。最後の豚の出産のエピソードが圧巻。

「孤愁」6号豊田一郎「子羊に贈る夜想曲」は、古代が舞台で日本とは特定されていないが、日本でいうならば縄文と弥生の時代の文明の邂逅と衝突を描く。この作品では登場する個々の人物たちが主人公ではなく、文明が主人公。このよくな書き方があるのか、と感心させられた。いままさに西欧的価値観とイスラム的価値観の衝突が危惧されている。すぐれて時代的なテーマである。

「文芸東北」五一八号は、真船均「秋の窓辺」。主人公は町役場の出納係で四十歳になり妻と子どもがいる。彼は文学的な野心があるのだが、彼の日常から外に出ることができない。13年前東京にでた友人はいまでは大手印刷会社の大物となった。ある夜彼の招待で町では高級な料亭に誘われたが、なかに入ることができずに不機嫌な妻が待つ家へと帰宅する。

啄木の「友がみなわれよりえらく見える日よ　花を買い来て妻としたしむ」を想起させる好短篇。

「詩と眞實」七二三号では　今村有成「禁断の木の実」は一九六〇年代の地方の青春群像を描いていておもしろい。

「文学街」二六五号の荒井登喜子「夢かうつつか」は、四十代のがんの末期でホスピスにいる男が主人公。幼いころ父を失い、母は複数の愛人を持ちそのうちのひとりに殺される。ストーリーはエンターテイメントタッチだが、その文学の「あはずれ」感に深い共感を覚えた。二六七号では短篇に2作、森啓夫「古里崩壊」と白石すみほ「付け爪」。森の作品は古里を訪れた主人公の同級生交歓の話であるが、故郷を出てからの時間の推移や人の考え方の変化に外景を重ねあわせた作品。白石は女友だちに頼まれその祖母の介護や見守りをするはめになったフリーターの男の子の話でストーリーが巧み。登場人物の立ち位置がよい。

「全作家」の前号の75号は小野村誠「歳の差」。娘ふたりを残して妻と死別した男が、結婚した娘に勧められ見合いパーティーに参加する話。実は結婚したいと思った年下の女性は娘の友人だったというありえない話。男の夢とエロスはいつも儚い。

誌面の都合で載せられないものは以下の通り。「四人」84号、「労働者文学」65号、「柵」11号、「ちば文学」5号、「半獣神」87号、「なんじやもんじや」8号、「河」一五一号、「中部ぺん」16号、「椽」二七五号、「北斗」五六〇号の各誌。原石寛の「自選作品集」の持続的な刊行には敬意を表する。

今回はベスト6。高崎綏子「水脈」、猿渡由美子「線を打つ」、佐藤浩二「月よ銀木犀を照らせ」、相加八重「糸山村立芋の迫小学校で」、真船均「秋の窓辺」、庭冬明「静かな風景」。

全国から送られてくる同人雑誌を読むと、いまずぐにでも彼の地にでかけて皆さんと青臭い文学論を闘わしたい欲求にかられる。年中無休の生活をおくっている私には叶わない夢だが、ひたむきさと同時に「文学で遊ぶ」くらいの余裕を持って、道を歩んでほしい。高いところからものを言うようではない。申しわけないが、文学が生き延びていく最善の方法かもしれない。

筆者プロフィール..

文芸評論家、放送作家、NHK学園自分史講座講師。現在時事通信、北海道新聞、東京新聞で書評を担当。テレビでは愛川欽也、武田鉄矢、中西哲生、香坂みゆきなどのレギュラー番組の企画・構成、台本制作を担当。人気番組「愛川欽也パッキンジャーナル」ではコメンテーターとしてもレギュラー出演中。著書「村上春樹とドストエーフスキイ」「新宿小説論」ほか、共著「立松和平 ドロップアウト」「立松和平 文学の修羅として」ほか。